

はじめに

学校長 宮川正美

本校のめざす教育は、12年間の一貫教育によって社会的自立を達成させることにあるが、各学部間で教育方針や教育課程の連関が、必ずしもスムーズには行かず、全員の共通理解を得るまでには長い道程と時間を要した。しかし、後退することなく、常に前向きに共通理解されるまで論議を尽くし今日を迎えることができた。

初年度における本校の児童生徒の実態調査から、一人ひとりの障害を克服し発達する力を育てるためには、どの児童生徒にとってもその根底の力となる「からだづくり」を進める必要があることがわかった。このようにして設定された本校の研究テーマ「発達と障害に応じた教育をめざして—からだづくりを通して—」を基に、約4年間の実践が重ねられた。その間、2年、3年と研究実践が進むにつれて強制的な「からだづくり」では持続性に欠け効果があがらないこともわかり、何回も何日も研究協議を重ね、幾度かの紆余曲折の末本校のめざすからだ像がづくりあげられてきた。

また、小学部の遊び、中学部の遊び的労働、高等部の労働のように小、中、高の連携を図りながら、自然と自分から取り組み、知らず知らずのうちに「からだづくり」が出来る授業づくりに配慮がなされ、特に意欲づけでの面に苦慮された。その結果、本校の児童生徒にとって運動場面や生活場面だけでなく、あらゆる場面に臨んで、自ら行なおうとする意欲が見えだした。

「障害児教育は教育の原点である」といい、また、いわれてきているが、その意味を改めて問い直すよい機会かもしれない。4年間を通じての研究によって本校の児童生徒にとって緊急に取り組む問題点と将来に向かっての問題点が見えつつあるので、次の研究課題として取りあげねばならないであろう。

研究をすればするほど奥が深く課題も多く生じ、まとまりがつかなくなるので、本年をもって、締め括りの年とした。本来、研究というものは期間を区切ってすべき性質のものではなく、次々と発展させて行くものであると思うが、それでは、あれもこれもと求め総花的に陥る恐れがある。ここらで一応区切りとしたが、一面的、独断的と見られる部分もあると思うので今後の研究につなぐ意味においてもご批判を頂ければ幸である。

最後になったが、今回も鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取県盲・聾・養護学校長会、鳥取県心身障害児教育研究会、鳥取県東部地区心身障害児教育研究会から研究発表大会のご後援を頂いたことに対し、また、鳥取大学教育学部教官にご協力頂いたことに対し深く謝意を表したい。